



群馬岳連

雪上技術講習会開催される

登山指導委員会副委員長 石橋 修

指導委員会では、平成二十六年四月六日(日)、谷川岳マチガ沢にて「雪上技術講習会」を開催した。目的及び対象は、「今シーズン雪山デビュー」をされた方の安全登山の為に雪上技術の習得や、G.W.を前に積雪期登山の技術の再確認と

び、ステップアップを目指す」ものである。

下界では桜が満開の季節ではあったが、当日は、午前中はなんと天候がもつたものの午後には吹雪の中での講習となり、予定を早めに切り上げての終了となった。

受講者は総勢二十五名、うち岳連会員が十八名、一般からも七名の参加を得た。ちなみに一般参加者は、スノーボーダー及び群馬県防災航空隊からの参加であった。

講習は初級・中級に分かれ、初級は「歩行」をメインに、中級は「確保」をメインに行われた。適宜合流しながら進められた。講師は、初級の主任を西巻さん(沼田山岳会・補助に桜澤さん(同)・岩井さん(個人会員)、中級の主任を角田さん(前橋)・補助に長田さん(沼田)・石橋(独峰会)の各氏に

押さえておく必要はあるが、それ以上に重要なこと、意識しておくべきことは「滑り出したら止まらない」ということである。止める技術よりも、とにかく滑り出さないこと(初期制動)、その前に「絶対に転ばない歩行技術」が何よりも重要なのである。人間、転んではいけないところではそうそう転ばない。ふつと気が抜けたときに、いかに行動しているか。意識なくとも「絶対に転ばない」ように歩いていなければならない。

その後、積雪期特有の支点構築(ピッケルやスノーバーを使用)から、スタンディング・アック・ビレイ(SAB)による確保を行った。SABによるボディビレイでは、「山脇・谷肩」とザイルを通すことを覚えておいていただきたい。また、土嚢袋やボサ、谷川特有の灌木を利用した支点構築を学んだが、実際に自分で構築した支点がどのくらいの加重に耐えられるか試すことができたのは貴重な経験であろう。

最後に緊急時のための半雪洞を掘って終了となったが、吹雪の中でも雪洞の中に入って風を防ぐことで、どれだけ体感温度が違ってくるのか実感できたのではないだ



スノーバーによる支点構築



ボサからの支点構築



簡易シェルターの設営

今回は群大の斎藤Dr.に山で使えるような搬送機材をお借りして、七月の訓練前に使い方の確認を行いました。機材は組立式タンカ、頸椎まで固定可能な釣り上げハーネス、室素ボンベで瞬時に膨らませられる簡易タンカ(エ

ログリフトの復習でした。

参加者からもあったが、「慣れできたときにこそ、基本を再確認」していただきたい。雪訓も新人時代には物珍しさもあり熱心であるが、何度かやっているうちに飽きが出てくるのは事実である。そんなときにこそ基本に立ち返って、自己の技術を再確認する必要がある。年に一度とはいわず、講習会で学んだことをぜひ会に持ち帰って共有していただきたい。「意識しなくとも実践できるようなること」こそがこの講習会の趣旨である。

ファーストエイド講習会

群馬岳連遭難対策委員会 毛 呂 憲 治

(前橋山岳会)

六月二十五日に救助隊員のスキルアップを目的に、ファーストエイド講習会を、群馬県生涯学習センターで行いました。今回の講習内容は、搬送機材の確認、高エネルギー障害の可能性のある要救助者の初期観察、ログロール、

アマト)など普段使う事の無い機材について勉強でき、大変参考になりました。

また、初期観察では、声のかけ方から始まり、頸椎の固定、気道確保、呼吸状態、循環状態の確認



までを、様々なシチュエーションで行いました。中には「うつ伏せで倒れていて確認が困難な場合」や「顔面強打により、口の中が血液で塞がっている場合」等、私には難しい課題もありましたが、参加者は講師を含めて一〇名と少なかったため、参加した私とすれば、内容の濃い講習会となり、より理解を深めることができました。

た。何を観て何を優先させるか確実に覚えていきたいと思います。』との声も寄せられました。

今回の講習で一番感じたことは、頸椎固定の大切さです。今までは手順として「固定」をしていましたが、頸椎固定を慎重に行わないと、言い方は悪いですが、とどめを刺してしまうことになりかねません。そうならないためにも、訓練や講習会に積極的に参加し、スキルアップしていきたいと思えます。



事故予防への一助に ―林野庁中之条講習会―

群馬岳連遭難対策委員長 町田 幸男

六月十八日(水)、10:00～16:00、林野庁吾妻森林管理署(中之条)からの依頼でロープワークに関する講習会を開催しました。講師は角田遭対副委員長と町田で対応しました。本署での講習会は昨年に続き二回目で、昨年は、山での事故事例から応急手当、有効なロープワークと搬送について初歩的なセルフレスキュー全般に関する講習会を実施しました。

今年はロープを活用した山中での安全確保について講習しました。背景には他の森林組合での滑落事例があり、同様な事故を未然防止すべく補助ロープを購入したとのこと。しかしながら、たった一度の講習会でマスターできるはずもなく、今回ロープワークについてより実践的な使用方法を取得するための講習会を依頼されたようです。参加者は事務局を含め二〇名で、うち

五名が女性でした。所轄は草津・中之条の吾妻地区で、実際山中で活動されているのは三〇名ほどのこと、うち七名が女性職員であるのには驚かされました。講習会場は車で約二〇分の榛名山西側山腹にある、森林の緩斜面を利用して行いました。最初にスリングを使用してのチェストハーネス作り、続いてロープの結び方として代表

的なフィギュアエイトとクロープヒッチについて講習しました。縛り方についてはこの二種類のみ指導しましたが、クライマーではない職員にとってはちんぷんかんぷんだったようで、普段当然のように使っている私たちがからずると、かえって教えるのに苦労させられました。縛り方について一通りの説明以後、実際にφ8mm×30mの

補助ロープを使った悪場の通過についてシミュレーションを行いました。三名一組となり、まずは崖を想定してのトラバースについて講習しました。はじめにリーダーがロープをフィックスし、フィックスロープを安全に通過するためのカラビナ架け替えなどを行いました。次に急斜面での登下降を行いました。登りではオートブロックによる安全確保、下降ではエイト環やムンターヒッチ



によるラペリングを実習しました。最後に六名一組で林道までの連続下降を行いました。2mほどですが林道出口はコンクリートの垂壁になっており、みなさん程よい緊張感を味わっていたいたようです。講習終了後、事務所に帰り池田所長や担当者や登山や管理署での遭難事例について情報交換を行いました。職員の方々は基本的に単独では行動しないが、場合によっては過去に一人で入山し帰宅が一日遅れた事例もあるらしいで

す。登山でもここ数年、未組織登山者の道迷いによる遭難が増加している話をすると、署でも事故に備えた装備をより強化したいとの意見をいただきました。今回のような他組織からの講師派遣依頼は、岳連としては大変ありがたいことだと思えます。私たちの技術が多くの人たちに活用いただけ、また若手指導員のスキルアップにもつながり、何よりも岳連の存在価値が評価される機会ではないかと思えます。このような活動が、今後とも継続していかれることを切に願います。

JMA

守ります。美しい日本の山。

あなたの保険は、 安心して登山ができる保険ですか。

救助費用はタダではありません。
山岳保険の加入は登山者のマナーです。

■平成24年山岳遭難の概況

(警察庁生活安全局地域課 平成25年6月13日)

発生件数 **1,988** 件 (前年対比 158 件増)

遭難者数 **2,465** 人 (前年対比 261 人増)

死者・行方不明者 **284** 人 (前年対比 9 人増)

詳しくは → <http://www.sangakukyousai.com>

お問い合わせは

日本山岳協会 山岳共済会

事務委託：日本山岳協会山岳共済事務センター
月～金 10:00～17:00 (土・日・祝日除く)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707
TEL: 03-5958-3396 FAX: 03-5958-3397
E-mail: sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp
U R L : <http://sangakukyousai.com>

* 山岳保険は必携登山装備です

救助隊訓練に参加して

群馬岳連救助隊員 金澤 浩史

(太田山岳会)

平成二十六年七月五日〜六日に遭難対策委員会の救助隊訓練に参加しました。二日間ともにワイヤー技術の習得を目的に一ノ倉沢で実施されました。

一日目は白毛門駐車場に救助隊長含め九名がAM7:00に集合しました。「姿勢を正して！れい！」隊長の掛け声により訓練開始です。一同が礼をすると

今までの談笑していた和やかな空気が引き締まりました。その後隊長から二日間の訓練内容について説明があり、一日目はテールリッジへのフィックス及び三〇〇mのワイヤーの張り込みをやり、二日目はチロリアンブリッジによる引き上げ及び搬送をやることでした。



張り込み支点とウィンチ設置

た。私はワイヤー訓練が初めての経験でしたので、他のベテラン隊員が闊達に質問などをしているはたで、必死に訓練内容を頭の中でイメージしましたが、それらを膨らませることはできませんでした。

一ノ倉沢へ運ぶ装備の点検を終

え一ノ倉沢出合へ移動が完了したのは9:00頃でした。三〇〇mのワイヤーを張り込むための装備を荷揚げするには、九名では一回じゃ終わらないなどと話をしていました。何だかんだと言つて結局は一回で運んでしまいました。

一ノ倉沢はまだテールリッジまで雪溪が続いていました。小雨が降りしきる中、重い装備を持ちながらテールリッジの基部へ向かい取付きへ到着すると、そこからフィックスを張る作業にかかりました。私は三人一組のセカンドで登ることになり、クライミングはしないでどんどん登れとの指示を受けました。ユマールでガンガン行けという意味です。よしガンガン行こう！と意気込むのは良かったのですが、いざ登ると体が全然上に上がって行きません。普段登っていたテールリッジのイメージとは違い、装備の重さにより体の動きがこうも違うのかというのを思い知らされる結果とな



チロリアンブリッジによる救助

りました。

2ピッチのフィックス作業が終わり、最初の樹林帯上部からいよいよワイヤーの張り込み作業が始まります。まずはメインの支点を構築し、その下にディスクの支点を作りセットしました。いや正確には私はベテラン隊員たちが支点を作る作業をただ後ろから見えました。副隊長には「誰かが一つの作業をやっていたら他の人間は次に何をすれば良いかを考えて、それを行動に移さなければダメ

だ。」との指示を受けますが、私は頭と体が働かず、何も行動に移すことができなかったのもどかしい思いでいっぱいでした。

支点構築が終了すると隊員が雪溪上までワイヤーを三〇〇m伸ばし固定することで張り込みをします。すると見事にテールリッジの樹林帯から雪溪上に三〇〇mのワイヤーのラインが出来上がりました。ワイヤーには滑車を取り付け最初に隊員二名が降りて行き、その後私も怖さ楽しさ半分ずつの複雑な胸中のなか、ワイヤーに吊り下げられ下降しました。

その後、いくつかのミスにより隊長のお叱りを受けながらワイヤーの撤収作業を行い、明日のチロリアンブリッジ構築のためのワイヤー装備等をひょんぐりの滝のそばにデポし、初日の訓練は終了となりました。

二日目も白毛門駐車場にAM7:00に集合しました。一日目で帰られた方、二日目から参加の方などもあり、初日と同じく九名が集まりました。一ノ倉沢出合に到着すると、晴れていたのがクライミングのルートがよく見えませんでした。私は昨年末に両足骨折し、今シーズンにはクライミングが出来そうに

ありませんが、一ノ倉沢の岩壁の各ルートに見入っていました。そうしているうちに、副隊長が今日のひょんぐりの滝周辺での左岸と右岸でのチーム分けの指示があり、私は右岸の方になりました。訓練の想定は、沢の中央付近の雪渓が崩壊し、滑落し身動きの取れなくなった要救助者を助けるためにチロリアンブリッジを張り込むというものでした。そしてチロリアンブリッジ中央付近から要救助者がいる地点までウインチを使ってワイヤーで下降し、要救助者をつりあげるとい



雪渓での負傷者搬送シミュレーション

こーでもない。」と数人で試行錯誤して設置する次第でした。その後、二人の隊員が一回ずつワイヤーをつたって実技訓練を実施し、チロリアンブリッジによる引き上げ訓練は終了しました。

最後の訓練メニューはストレッチャーを使った搬送です。雪渓上では基本的にはストレッチャーを滑らすことでそれほど苦労はありませんでしたが、雪がなくなるとストレッチャー上げ下げが大変で、急な箇所ではロープで確保しながら下ろしていきま

した。二日間の訓練を終えて沢山のことを知り勉強することができ、中身の濃い時間を過ごすことができました。頭では理解して

も、それを実行することの難しさが良く分かりました。また、今回勉強できたことを消化不良せず身につけていくには、何度も繰り返し実践するしかないと感じました。救助隊訓練に参加する機会に限られていますが、一つ一つの技術を身に付け、確実にレベルアップしていきたいと思

尾瀬ゴミ持ち帰り運動に参加して

自然保護委員会副委員長 松本 博

毎年六月の第一土曜日は、尾瀬ゴミ持ち帰り運動の日で、このところ何年か大清水で参加している。朝五時から七時半まで、登山者に、ゴミ袋と簡単な山の現状の案内を配り、ゴミ持ち帰りに協力をお願いする。ただこれだけのことである。尾瀬は、山のゴミの持ち帰り運動の発祥の地で、もう何年もこういう運動は続けられている。こういう伝統のある尾瀬のことだから、尾瀬にはゴミなんか無

いんじゃないかと考えても不思議ではない。事実、ゴミは少ない。今年は、自然観察会は四阿山である。この山の下見は、用事が済んでからでは無理で、尾瀬沼までゴミ拾いを兼ねて行くことにした。「まず、ゴミなんかねえだろう」と、委員会のメンバーはタカをくくっていた。ところが、尾瀬沼を往復するまでの区間には、飴や菓子の袋、落し物などが、結構落ちていた。雪解け後だったせいなのか、うっか

り小さいごみを散らかしてしまっただけなのか？こういう類のゴミは、人間が山に入る限り、全く無くなることは無いようだ。石油製品から作られたものは、何年たっても消えることが無く、また分解されて粉々になった場合には、自然界に悪影響を及ぼすらしい。帰り道、一の瀬と大清水の間で、水道のホースを巻く鉄製のものが、押しつぶされたかのような形で落ちていた。正確には、草むらに隠れていたのを、同行のM氏が見つけた。一同、こんなものは置いていくとしたが、個人会員のK氏が、心の呵責に勝てず、皆で交代で持って帰ることにした。一人

だったから、置いてきたらう。登山者が落としたものではないが、山に残されたゴミには違いない。

人間が、山に入る限りゴミ問題は、無くならないようだ。ゴミ持ち帰り運動は、続けることに意味があると感じた。

ワイヤーの張り込みはひょんぐりの滝から2ピッチほどザイルを伸ばした箇所から行います。荷揚げのためにフィックスを張るのですが、私は今回はサードで登りロープの固定作業を行いました。ただし、ただロープを固定するのとだけに終始し、あとから登ってくる先輩隊員に固定し直されている始末でしたので、何度もシチュエーションを変えて練習をしなければダメだと感じました。

ワイヤーは3本荷揚げしました。1本は右岸と左岸を繋げるためのもの、1本は救助者をデイスクで送りだすため、もう1本は救助者を崩壊地点にウインチを使って下ろすためのものでした。ワイヤーを伸ばすためのメインの支点作りとデイスクの設置作業は昨日見ていたので、特段迷うことはありませんでしたが、救助者を要救助者の箇所まで下降させるための動滑車の設置については、初めて使うものでしたので「あーでもない、

群馬岳連個人会員委員会

平成二十六年第四回交流登山報告

— 木曾御嶽山 —

個人会員委員会 古田 正信

期 日 七月十二・十三日

参加者 個人会員 二十一名

岳連スタッフ 八名

主行程 前橋・高崎からバス・御

嶽ロープウェイ・二ノ池

↓五ノ池小屋泊↓摩利支

天山↓剣ガ峰

↓田ノ原口↓

入浴・帰還

前日に大型の台風8号が通過して、二日間晴れの予報となり、ほつとしての山行となる。

前橋駅南4・30、高

崎駅東5・00発、吉井

ICから高速道に乗り、

横川、梓川で小休止し、

塩尻北ICで下り、木

曽街道を通り、御嶽

ロープウェイ鹿瀬駅に

9・50着。ロープウェ

イで飯森駅2120mに着くと、

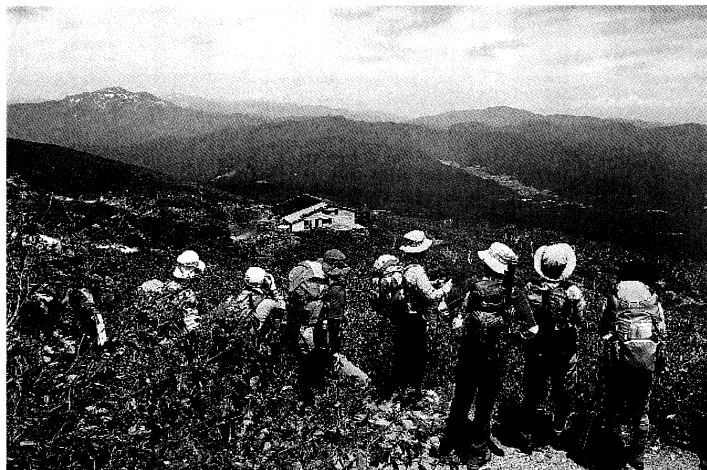
木曾駒ヶ岳方面や槍・穂高、乗鞍

岳が素晴らしい。

準備体操後二十九人を健脚組と

楽歩組に分け、10・30歩行開始。

木曾ヒノキのチップを敷きつめた



八合目女人堂上部より乗鞍岳、北アルプスを望む

登山道で、ヒノキの香りが心地よい。しばらく進むとすぐに七合目小屋だ。ここからの登山道もヒノキの階段が続き、樹林の中を登っていく。※途中で足首をくじいた人に出会ったので、岳連のスタッフか患部へスプレイをかけ、登山靴の上から素早くテーピングをしてあげたのはさすがである。

11・50に八合目の女人堂に着き、昼食となる。

石塔・石仏が多い。ここから展望が良くようになり、御嶽山頂もよく見える。当初はここから三ノ池へ向かう予定であったが、そのルートが閉鎖になっており、二ノ池直登ルートで宿泊地を目指すことになった。すぐに雪渓を越え、岩の転がる急坂を登る。上に小屋が見えるが中々着かない。九合半の覚明堂小屋に着くと、その上が2930mの分岐点となっている。13・50に分岐を通過して二ノ池へ向かうと、三ノ池方面がよく見えてくる。少し下った二ノ池には、大きな雪渓が残っている。賽の河



摩利支天山分岐からの剣ガ峰

原まで一旦下って摩利支天乗越へ登り返す。※途中私が浮き石で転倒し足を強打。応急処置をして頂き歩行を続けるが、足が痙攣してきたので、Nリーダーがザックを持ってくれ、ストックを貸してもらい、何とか摩利支天乗越を越え、ゆつくり五ノ池へ下る。

五ノ池小屋へは、当初の予定より二時間遅れで16・00着。更に一時間位遅れで最終者が着き、皆でテラスで飲み会になった。Oさんがワインや酒を三本も提供し、山岳風景を楽しみながらの楽しい交流会となった。小屋は混んでおり、

敷布団一枚に二人であった。

翌日は朝から雲行きが悪く、遅朝食後、全員が合羽を着て準備体操をし、7・50に歩行開始。ガスで展望のない中を登って行く。健脚組は摩利支天乗越から摩利支天山頂を目指し、楽歩組は剣ガ峰へ直行となる。

健脚組はガスの中、足許のコイワカガミ等を眺めながら、岩場を乗り越え、8・40に摩利支天山頂2960mに着く。記念写真を撮って下山を始めると、段々雨が強くなってきた。三ノ池分岐点の避難小屋に入って小休止。ここからは本格的な雨の中の歩行となり、賽の河原ではガスで方向が分かりにくく、二ノ池小屋は何も見えない中を通過し、雪渓を登り、やつと山頂小屋がぼんやり見えてきた。剣ガ峰山荘の横を抜け、最後の階段を上ると3067mの御嶽山頂で10・30到着。既に楽歩組は到着し待ってくれていた。

暴風雨の中全員で記念撮影をし、風雨が激しいので、下山に向かう。ここからの下りでは暴風雨に曝され、合羽の上から当たる雨粒が痛い。女性の人は飛ばされそうな感じで、Sさんが手を取ってあげて下って行く。ザックカバーも暴風

国民の祝日「山の日」制定

群馬県山岳連盟会長 八木原 罔明

で二人が外される。奥社本宮神社の社殿内に全員一旦集合し、また二組に分かれて下山を開始する。八合目の金剛童子まで下ると風が少し凌げるようになり、大江権現の鳥居まで来ると皆ほつとして、思わず無事下山に手を合わせる。遥拝所、田の原大黒天を過ぎ、バスの待つ田ノ原駐車場2200mには13…10に到着。

バスで着替え昼食を済ませ待っている、楽歩組が14…10に到着。最終の四人はさらに遅れるとのことなので、岳連のYさん車への搭乗をお願いして、バスは雨の中を温泉に向けて出発した。

帰路は権兵衛トンネルを抜けて伊那の大芝の湯に16…40に着き、あわただしく入浴。さっぱりして、途中の東部湯の丸SAで夕食を摂り、最終の前橋駅には、21…10に無事に到着。

感想としては、三ノ池への直行ルートの開鎖が事前に判らなかったのかな、要所では次の大体の予定をもう少し説明してくれないかな、学習登山であるから悪天でも多少の無理は仕方がなかったのだろうな、遅れる人・負傷者を岳連の人達は良く面倒を見てくれたかななどと思った。

「八月十一日を国民の祝日にする」。《山に親しむ機会を得て、山の恵みに感謝する》。

国民の祝日「山の日」制定の意義である。本年、平成二十六（二〇一四）年四月二十五日、衆議院本会議で可決。約一か月後の五月二十三日、参議院本会議で可決され、成立した国民の祝日「山の日」である。登山界や我々山岳連盟にとってこんな嬉しいことはない。正式に休みとなる施行は再来年、平成二十八年八月十一日から。

それにしてもこれほど早く「山の日が国民の祝日」になるとは思ってもいしなかった。国会（議員？）というところの不思議さか？やるとなると動きも早い。

平成二十二（二〇一〇）年四月、山岳五団体による全国「山の日」制定協議会は発足し、一年後国会議員に向けた山の日制定要望書の提出を予定したが、三月十一日の東日本大震災で頓挫する。その後も研究・運動を続け平成二十四

（二〇一二年）十月三日、山岳五団体だけではなく関係団体や国会議員まで広範囲の人々が集まり「山の日」ネットワーク東京会議を開催した。この会議をきっかけに多方面で「山の日」運動が活発化する。当時は異論があつたが、六月第一日曜日を山の日の候補としていた。

その後様々な議論、意見の変遷、活動を経て、平成二十五（二〇一三年）四月十日、超党派「山の日」制定議員連盟（衛藤征士郎会長、谷垣禎一最高顧問）が発足したが、当初日本は先進国の中でも祝休日が多い（十五日）ので、経済界、教育界などからの反発もあり、「祝日」化は難しいのではないかと考えられていた。

超党派の「山の日」制定議員連盟が「八月十二日」で「祝日」を候補に絞った同年十月末、日航機事故遺族や群馬県関係者はその日が事故犠牲者の命日に当たる、として異論を唱えた。同年末には「八月十一日」案をまとめ、本年三月二十八日に衆議院に法律案を提出するに至った。たつた四年間の出来事。「山の日を作ろう」と



谷川岳ノ倉沢を登る小学生達

いう運動が何時から始まったかは正確には分からないが、文字にされたり、言葉としてハッキリ伝わり始めたのは日本アルパインガイド協会による「十月三日を登山の日にしよう」だったかも知れない。十月三日を「とう」「さん」と「ざん」とこじつけて秋の登山シーズン真っ盛りのこの時期に定めようという運動だったような気がする。

各地、各県でそれぞれの山の日や「〇〇山の日」を定めているが、それもアルパインガイド協会の提唱より速いものもあるが、遅かったのではあるまいか。

しかし実は今から半世紀五十年以上前の昭和三十六（一九六二）年七月、「安全登山と資源愛護」を目的とした、読売新聞社が主催した「夏の立山大集会」登山教室の閉会式で、東京代表が「わが国は世界でも珍しく全土にわたって脊梁山脈の走っている山国であるのに『山の日』がない。この集会に山岳人の心を結集して山を愛し安全登山をめざした『山の日』を提唱し全国の山岳家によびかけよう」という画期的な提案があり、賛成、異議なしの同感の声とアラシのような拍手が起こり満場一致で「山

の日」制定の提案をする
ことを決議していた
のです。

これに対し高橋定昌
大会ヘッドコーチ（後
に日山協専務理事、副
会長）は「日本の全て
の山岳人にあらゆる組
織を通じて「山の日」
制定に努力する呼びか
けのお手伝いをしたい」
と協力を誓った（一九
六一年七月二十七日付
け読売新聞社会面）の
であるが、時間の経過
と共にどこかに消えて
しまったらしかった。

それが具体的な動きに変わった
のは平成十四（二〇〇二）年「国際山
岳年」の年である。その国際山岳年
であるが、おさらいするとその十年
前の平成四（一九九二）年六月、ブラ
ジルのリオデジャネイロで「環境と
開発に関する国際連合会議、いわ
ゆる『地球サミット』が開かれ、地球
環境保護の指針「アジェンダ21」が
採択された。アジェンダとは議題。
四十章からなるアジェンダの十三
章は「脆弱な生態系の管理・持続可
能な山岳開発」である。

平成十（一九九八）年十一月の第



梶池から天狗原上の雪渓に行く

やサービス―特に水の供給と食
料の安全保障―をもたらす点に
関する重要性について、認識や
知識を増加させること」

* 「山岳の共同体・社会の文化遺
産を振興し守ること」

* 「山岳地域において頻発する紛
争やそれらの地域での和平を促
進することに注意を払うこと」

であるが、「登山年」ではなかった。
しかし、山岳と言われる部分は地
球の陸地面積の約五分の一を占め、
世界人口の十分の一の生活を直接
支え、さらに世界人口の半数以上
にさまざまな資源と
サービスを提供してい
るという。しかし山岳

地域の生態系は変化し、
危機に直面しており山
岳地帯の環境劣化は急
激に進んでいる。故に
適切な資源の管理と住
民の社会経済面での発
展が早急に求められて
いた。日本の面積の七
割は山と森である。

国連の仕事でローマ
に本部を置くFAO、
世界食糧農業機関が実
務担当であったが日本
の政府機関は殆ど関わ

らず、日本は日本独自のやり方で
国際山岳年を進めようと田部井淳
子さんを委員長に登山組織、学者
グループなど山に関わる人々によ
り国際山岳年日本委員会を充足さ
せた。

FAOが決めた国際山岳年のス
ローガンは「We are all mountain
people（我らみな 山の民）」で
ある。二〇〇二年一月、国連大学主
催の国際山岳年記念フォーラムを
皮切りにさまざまな行事を開催
し、七月六日〜七日の静岡県富士
宮市での「富士山エコ・フォーラ



尾瀬 大江湿原

ム・富士山の自然を君たちへ」と
題したフォーラムを開く。千二百
人で埋められた会場には当時の大
木環境大臣も参加し、小泉首相か
らはメッセージも寄せられた。

小中学生によつて読み上げられ
たメッセージの最後に「富士山に
集った私たちは、きょう、ここで
誓います。（中略）そして、毎年、
そういう思いを新たにするために、
日本に「山の日」をつくることを
提案します」と読み上げられた。

参議院での可決・成立を受け
『全国「山の日」制定協議会』は
「制定」を外して『全国「山の日」
協議会』として運動の中核を担う
山岳団体として「祝日制定の意義
を広く伝え、広範な分野の発展に
寄与する」という目的に向かって
運動を進めて行く。

とにかく「山の日」が祝日にま
でなる事が決まったことは喜ばし
い。しかし喜んでばかりではいら
れない。我々登山団体としては責
任も重くなる。これを契機に仲間
をより多くし、登山の普及・発展
につなげなくてはならない。そし
て、それに伴って心配される事故
の防止、減少に努め、環境保護関
連の責任も生じます。これからが
始まりです。

関東 オートキャンプ場 なら 桐の木平キャンプ場 溪流サイト 団体専用あり

桐の木平キャンプ場

〒378-0102

群馬県利根郡川場村川場湯原2681

tel 0278-52-2442

電話、弱電工事

プモリ電設

〒379-2223

伊勢崎市小泉町 252

☎ 0270-62-2012



(有) 山とスキーの店 石 井

DreamBOX

伊勢崎市宮子町 3448-2

TEL 0270-21-8025 FAX 0270-21-8026